令和６年２月 17 日
北関東フォーラム
於：シムックス

中斎塾　北関東フォーラム
令和６年度 第２回

おはようございます。

開会挨拶で塚越参事が学びについて話をされました。我が意を得たりというお話で、大変良うございました。塚越さんは人生を三つに分けておられ、第三の人生をスタートしたということですが、私も似たようなことをしております。確か 30 代の時、自分の人生の計画を立てました。人生を８期に分けて、今は第６期のところです。

本日のレジュメにも書きましたが、木内信胤先生は「色々な知識を集めても駄目で、魂につきささるような知識を必要程度持たねばならん」と言われています。そういうものの考え方・行動は、人生の後半になればなるほど磨きがかかってくると思っています。同じ話を聞いたり同じ本を読んだりしても、魂に突き刺さるようなものかどうかは、ある程度人生経験が豊かにならないとスーッと入ってきません。ですから塚越さんが第三の人生と言われた 80 代以降は、本当に花の開く人生・年代だと思いますので、わが意を得たりという感じでお聞きしました。

もう一つ、塚越さんの話の中で感じたことがあります。学びには、良い師匠や良い書物に出会うことが大事だと言っておられました。良い師匠たちが残した言葉というものは、大体皆さん一貫しています。それは、「師匠の求めた道を歩け」ということです。すなわち、師匠の後から師匠が残した手引きを頼りにしながら進むのでは、師匠は超えられない。師匠を超えるには、師匠が求め続けた道をまた求めよということです。

写瓶という言葉があります。師匠が自分の求めた道で得たものを、この人間だと思った弟子に、持っている全てをそのまま注ぎ込む、それが写瓶です。白隠禅師という禅の高僧がいます。白隠禅師は若い頃、修行をして自分なりに悟ったと思うことが何度もあって得意になっていたけれども、生涯の師匠に出会って、「お前の悟りは、なま悟りだ」と叩かれ、それから猛修行に励みます。するとある日突然、仏教の真髄に触れたような天にも昇る氣持ち、いわゆる法悦の境地に入ったと感じたといいます。托鉢から帰って師匠のもとに行くと、白隠禅師の顔を見た師匠から、「鶴（白隠禅師の呼び名）や、お前はでかしたぞ。私の衣鉢を継ぐ者はお前になった」と言葉をかけてもらったそうです。悟りの境地に入って、人間が変わったということでしょう。その後も修行を続けながら、世に臨済宗中

興の祖、白隠禅師と言われるようになりました。

このように人間が変わる時期には、若い時もあるし、中年の時もあるし、それこそ第三の人生の時に悟る場合もあります。どこで「悟り」というものを体認出来るのか、これは本人の努力のしからしむる所ではあるでしょうが、色々な縁と出会って、縁と縁がぶつかり合って混ざり合い、それで「悟り」というものが生まれるのだろうと私は思います。

「悟り」について、木内信胤先生の話の中で私がつくづくそうだなと納得し理解しているのは、「悟り」には、一日の中で悟ったと思うような小さな悟りがいくつもあって、それらがだんだん溜って、溢れんばかりになった時に大きな「悟り」に繋がるということです。

塚越さんの話に触発されて、「悟り」に関して申しました。今、塚越さんは悟る道をひたすら歩み続けている氣が致しました。

学びを深める

では、レジュメに入ります。北関東フォーラムは相当学びを深めて参りました。だいたい皆さん論語に親しみを持たれ、論語に関する書物を手に取ったり、論語に触れることがごく当たり前になったと感じます。さほど違和感を持たずに、自分で好きな言葉を見つけ出すようになったのではないでしょうか。ということは、レベルが上がったと思って良いと思います。

北関東フォーラムでは論語を一通り読み終わり、論語の中で何度も出ている言葉についての解釈も致しました。ですから皆さんは、論語って一体何なの？　何か良いことが書いてあるの？　と聞かれたなら、私はこう思うと何かしら話が出来るようになったと存じますが、如何でしょうか。

中斎塾フォーラムは私が 59 歳の時、準備期間ということで 1 年間お話させて戴き、60 歳から正式にスタートさせました。もうすぐ 20 年になろうとしています。これだけ論語に関する時間を取って、皆さん方も大分理解されたと感じるところですので、そろそろ第二の段階に北関東フォーラムは入らねばならないと思っています。

第二段階としては、論語がどういう立ち位置にあるのか、論語とは一体どういうものか、といったことをお話しする段階に来たと思います。その前に、中斎塾フォーラムの発足の経緯、基本理念である「知足」に込めた当初の思いをお話しましょう。

私は学生時代の終わりに、漢文を教えて戴いた石川梅次郎先生から、「還暦になると社会に恩返しをする年代に入る。よく考えて実行しなさい」と教えて戴きました。それがず

っと頭に残っておりました。28 歳で会社を創業し、50 代まではがむしゃらに突っ走ってきました。50 代の終わりになったら、頭も体もボロボロになっていました。58 歳で社長業をバトンタッチし代表取締役を降りたら、それまでどうにも治まらなかった頭痛がなくなりました。社長業は大変な重圧だったのだなと感じました。当時は、魚が水の中にいれば水圧を感じないのと同じように、ごく普通に働いていたつもりでしたが、社長を降りた途端に、翌日から身も心も非常に楽になったことを覚えています。

60 歳を目の前にし、石川梅次郎先生から教えて戴いた言葉を思い出し、社会に対して何を恩返しすれば良いかずっと考えて、自分なりにハッと思った。いわゆる小さな悟りを得たわけです。今までの人生 58 年間を振り返ってみると、貪欲ではなかった。しかし学びたいという気持ちは強烈にあった。それを更に深めるためにも、社会に対する恩返しは何かを一生懸命考え、ふっと湧いたのが「中」という文字です。中庸・中道・中和の「中」です。貪欲に物を貪らない、ほどほどにする・・・この「中」というものの考え方を進めるがよい。それを言葉にすると「足るを知る」、この考え方がこれから生きていく上で必要だとつくづく感じました。

また、世界全体見ると諍いが多い。日本は戦争に負けてアメリカが乗り込んできた歴史があり、私の学生時代はベトナム戦争がありました。20 代で東南アジアを回った話をフォーラムでも何度か申しました。そこら辺からずっと俯瞰して見ると、やはりどこの国においても必要なのは、「足るを知る」という考え方だと感じました。

ですから心の奥底から突き上がってきたものが「足るを知る」という考え方だったのです。この「足るを知る」という考え方をまず身近なところから日本全体に広げ、それが世界全体に広がっていけば素晴らしい、それが社会に対する恩返しになると考えました。

そして 1 年間を準備期間として、「足るを知る」という考え方を根底に、論語を読ませていただいたところ、これは間違いないと確信できたので、1 年後正式に中斎塾フォーラムをスタートさせました。北関東フォーラムは、そういうことに関するお話をする段階に入ったと思いましたので、第二段階だと申し上げました。

足るを知る

そこで、今日のテーマは「知足」を取り上げました。

論語の中に「知足」という言葉はありません。「知足」という言葉があるのは仏教です。お釈迦様が「少欲知足」という言葉を出された。これは、足るを知るという思想です。

レジメをご覧下さい。「知足」というと老子を出すのが普通です。老子について一つ申し上げておくと、老子は孔子の師匠、孔子がもの教わった人物といわれていますが、私は

どうも信じ難いと思っています。老子は実在したという学者の方は大変多いですし、私もそう思います。しかし、老子が孔子を教えたという話は信じ難いと思っているので、それは採りません。

老子については、小川環樹先生の書かれた『老子』という文庫本がありますので、氣になった方はお読み下さい。ちなみに、小川環樹という方は京都大学を出た先生で、お兄さんが貝塚論語の貝塚茂樹先生、そしてノーベル物理賞を受賞された湯川秀樹さんです。

では、老子の文章から読みますので、後についてお読み下さい。老子とは人の名前であり、書物の名前でもあります。私が老子と言う時は、本のことを指すと思って下さい。

① 人を知る者は智、自ら知る者は明、人に勝つ者は力有り、自ら勝つ者は強し、足るを知る者は富み、強めて行う者は志有り。

（『老子』）

「足るを知る」という考え方を非常に分かりやすく書いてありますので、簡単に説明します。

私は先ず、日本人の素晴らしさを感じました。「人知者智」という漢文に「人を知る者は智」とひらがなを付けた。それによってごく当たり前に読めるわけです。中国語を日本語に変えて、尚且つ、読めばそのままスーッと伝わってくるように翻訳をした。これは他の言語にはありません。改めて日本人の卓越した言語能力を感じさせられます。

智恵が身に付いている者は他人を知ることが出来るが、自分自身を知ることが出来る者は明者である。

他人に勝つ者は力を持つが、自分自身に勝つ（欲望を制御できる）者は本物の強者である。

（智・明・力・強を踏まえて）自分自身の欲望をコントロールし、ほどほどで満足する者は、心が豊かになり大いなる悟りを得ることが出来る。・・・悟りの境地を「足るを知る」で表しています。

道を求めて常に励む人は、向上心があって常に前進する。

② 多く蔵すれば必ず厚く亡う、足るを知れば辱しめられず、止まるを知れば殆うからず、以て長久なる可し。

（『老子』）

世の中を見ると、お金持ちが沢山います。ＧＡＦＡＭのように一人の人間が兆単位のお

金を持って良いのかと思います。日本人でも１億円のお年玉を配るなどと、馬鹿なお金の使い方をするなと思った社長がいましたね。

もの凄くお金持ちになったなら、それが全部なくなって更に大きな借金を持つ。沢山持つと、その沢山のお金は必ずなくなってしまう。

何でも貪欲に、あれも欲しいこれも欲しいというのではなくて、ほどほどで止めておけば、周りから後ろ指を指されることはない。

自分自身の欲望をコントロールする、止まることが出来れば、危険な目には遭わない。

多く蔵さない・足るを知る・止まるを知る・・・このようにして生きていれば、長くゆったり安心感に包まれて過ごすことができる。

足るを知るということは、一生涯安らかな心に包まれて過ごすことができる。よって足るを知るが良いということです。

③　禍(か)は足(た)るを知(し)らざるより大(だい)なるは莫(な)く、咎(とが)は得(え)んと欲(ほっ)するより大(だい)なるは莫(な)し。故(ゆえ)に足(た)るを知(し)るの足(た)るは、つねに足(た)る。

（『老子』）

禍はまがごとですから、大きな災難、戦争で言えば戦禍です。

惨禍の原因は支配者が強欲で、足るを知らないからである。貪欲に次から次と欲しがるのは良くない。足ることを知れば、いつも心が満ち足りている。

この場合は受容、受け入れるという観点で読めばよろしいと思います。満足に人生を歩むためには、ほどほどでいきましょう。貪る心を持っていたのでは手に入らないから、ほどほどという自制心を持つ。そういう気持ちでいれば、常に満足感の溢れた人生になるとお考え下さい。

老子は、逆説的に説明することが多く、ふわっと包み込むような説明はしません。木内信胤先生の言われる「魂に突き刺さる」ような表現、グサグサと突き刺さるような言葉を使いますので、そのように読まれるとよろしいでしょう。

次に挙げる源信は、柔らかな分かりやすい言葉で説明しています。源信流がよいか、老子流がよいか、お好きな方で読んでいただければ結構です。

以上で前半は終了です。知足という言葉は、「吾 唯 足るを知る」。龍安寺の石庭にありますね。「足るを知る」とは、ほどほどという言葉で覚えていただければよろしい。これが前半のポイント、エキスです。

では、後半に参ります。源信の書いた『往生要集』です。

④　足ることを知らば貧といえども富(ふ)と名づくべし、財ありとも欲多ければこれを貧と名づく。もし財業(ざいごう)に豊かなれば、もろもろの苦を増すこと、竜の首多きもの酸毒を増すが如し。まさに美味は毒薬の如しと観じて、智慧の水をもって灑(そそ)いで浄からしむべし。この身を存(たも)たんがために食すべしといえども、色味(しきみ)を貪りて驕慢を長(やしな)ふことなかれ。もろもろの欲染においてまさに厭(いとい)を生じ、勤めて無上涅槃の道を求むべし。

（源信『往生要集』）

ほどほどということを知っていれば、沢山お金を持っていなくても心が豊かな人である。・・・周りから見ると貧乏に見える。ただ本人は貧乏だと思っていなければ、別に氣にもしないわけです。終戦直後は、お金持ちも貧乏人も皆、一斉に横並びとなりました。松下電器の松下幸之助さんも、日本一の借金王と言われた時期がありました。お金を持っているか貧乏かでなく、気持ちの問題で、みな横並びが良いですね。

お金を沢山持っていても、欲が多ければ心が貧しい人である。・・・アメリカの大金持ちロックフェラーと天風先生の会話で、もうお金は要らないでしょうと天風先生が聞くと、「いや、もっと欲しい」と返事をしたそうです。こういう人は、心が貧と言えます。

財産をもっともっと増やそうと一生懸命になっていれば、それに伴って色々な厄介事が増える。・・・「竜の首多き」とは、欲望がいくつもある。「酸毒」は、とてつもない痛みです。あまり財産を増やすものではないと読めばよろしいでしょう。

美味しいからといってどんどん食って食べれば、胃の腑を破る毒薬になる。智恵をつけて食べ方を考えなさい。食べなければ生きてられないが、欲望のまま貪らず、ほどほどに食べるのが良い。

様々な欲を克服し、悟りの境地を求めなさい。・・・「無上涅槃」とは、最高レベルの悟りです。

源信は平安中期の天台宗のお坊さんです。ですから少欲知足の考え方です。江戸時代の沢庵禅師は、「朝にひと粥、暮れにひと粥にて足るを知る」と説きました。着る物は紙の着物でも間に合うし、住むには一畳あれば足りる。とにかく最低限のものだけあれば生きてゆける。心持ちが豊かであれば、こんなにいい人生ない、と残しています。そのように源信の文章も読めばよかろうと思います。

最後に挙げるのは、『木内信胤語録』の文章です。

安らかな心でのんびりとはいっても、生きていれば色々な問題にぶつかりますね。そう

いう時、どのように判断すればよいでしょうか。私はいつも「判断の三原則」と申し上げていますが、「判断の三原則」を活かす上においても、自分の心の中にグサッと突き刺さるような言葉や自分の判断基準のもとになるような原体験、そういうものがあれば判断は大変楽になります。

⑤　色々な知識を沢山集めても駄目で、魂につきささる様な知識を必要程度持たねばならない。

（『木内信胤語録』昭和 62 年 6 月 11 日　88 歳）

自分の心の中、魂に突き刺さるような知識とは、体験や言葉です。

但しその言葉というのは、相当練れていないと相手の心に棘で残ることもあります。そういう体験があったら、次はしないように氣をつける自戒が生まれると思います。また、自分の心に棘が刺さったと思う時は、やはり相手に伝える必要があるだろうという氣がします。

私も若い頃は、苦言を言うのは良いことだと思っていた時期がありました。しかし、やはり棘で刺さるような言葉は氣をつけなければいけないと感じます。そういう考え方を持つということは、その人間を向上させます。自分の話している言葉が相手にすんなり入っていけば良いけれども、棘で残るような言葉はできる限り止めた方がよかろうと思います。

恒例の質問

恒例の質問を致します。念押しですが、あくまでも主観です。客観をどんどん突き詰めていくと、主観になる。主観もずっと突き詰めていくと、客観になる。つまり、皆同じという考え方があります。ただ入り口は、客観から入るよりは主観から入った方が分かりやすいと思っていますので、主観でお考え下さいと申し上げています。

○　２月は良い日がずっと続いた、と主観でそう思う方

もう一度同じ質問を致します。

○　２月は良い日がずっと続いた、と客観で考えてそう思う方

主観は客観に通ずる。客観も突き詰めると主観になる。そう私は信じておりますので、こういうことを申し上げた上で、主観で考えるのと客観で考えるのとお聞きしました。ですからこれは、後で見直しをする時、主観から入った方が良いか、客観から判断するのが良いか、お考え戴く入り口だと受け止めて下さい。

後の質問は、主観で参ります。

○　２月は嘘をつくことが多かった方

○　嘘をつかれることが多かった方

では、

〇嘘はつかなかったし、嘘をつかれなかった方

テーマにもありますが、今は嘘があふれる世の中だから、嘘かどうか見極める能力を持ちましょう。分かりやすいところでは、以前、池上彰さんが新聞は読んでから１週間寝かせて情報が嘘かどうかを見抜く、という話を致しました。それも一つの方法です。

〇　２月は有難うと言う事が多かったし、有難うと言う事も多かった方

〇　２月は身体の手入れを一所懸命やった方

〇　２月は自分磨きを一所懸命している方

皆さん手が挙がって、結構です。

〇　昨晩眠る時に、明日以降を過去形で考えた方

令和６年を考える

では、テーマに入ります。令和６年の干支は甲辰です。「甲」は始まり、「辰」は龍です。龍がもの凄いエネルギーで驀進していくと障害物が出て、それを避けて違う道に進むとまた障害物が出て、また違う道・・・そういう一年だと申し上げています。これは悪いことが起きると考えれば良ろしいでしょう。例えば、今年は北朝鮮が韓国を攻めるであろうという話がまことしやかに出てきました。これも池上彰さんの言われるように一週間ぐらい置いて、嘘か本当が考えなければいけませんね。

１、健康

健康についてここにおられる皆さんに申し上げることは、まず声を出すこと。それからよく歩く・体を動かすこと。そしてよく眠ること。声を出すには、詩吟をお勧め致します。体を動かすについては、真向法知足会を推薦しておきます。

２、縦の学び　３、横の知識

自分は何のために生まれたのだろうか、一生涯で何をすれば良いのだろうか、・・・自分なりの悟りを持つ、それが縦の学び・縦の学問になります。

横の知識は、嘘があふれる世の中を判断するための知識を持つが良いだろうと考えています。色々な知識が増えれば増えるほど、判断材料が増えます。そうすると、これはどうもおかしいとか、これはまともである、ということが見えてきます。

５、我が信条

信条は、信念と置き換えて考えても結構ですが、信念は、固く信じて実行したいと思う所までが信念です。信条は、具体的に行動に移るための後ろから押す力です。「我が信条をもって」とは、行動を伴うから信条と言います。信念は、行動を伴わなくても信念と言えます。そこら辺が違います。したがって今年は「我が信条は、こうである」と言えると素晴らしいですね。

お時間が少なくなりました。時事評論に関していくつか申します。

横の知識と申しましたが、横の知識は色々なポジションで考えれば良いでしょう。今の日本を見る場合、私はアメリカを考え、ロシアを考え、そしてお隣の中国や韓国を見る。その上で日本を見るという順番です。

アメリカについては、トランプさんが氣になっています。トランプさんがまた復活するという話が非常に増えています。そうなれば又、アメリカファーストでやるでしょうから、世界は更に混乱し酷くなる。ロシア・ウクライナ戦争に関しては、プーチンさんの味方をするでしょうから、ウクライナが負けて一つの区切りがつくのだろうと見えます。ハマスとイスラエルに関しては、アメリカの力は及ばないと考えます。

ロシアについて見ると、北朝鮮に「韓国を攻めよ」とさかんに煽っています。おまけにプーチンさんは自分の政敵をどうも殺したようですね。ロシアは自分の周りに味方を増やして、結果としてウクライナを併合したい、そのように時間をかけてやっていくのだろうと見えます。

韓国については、だんだん力を失っていくだろうと思います。今は親日で進めているから、そのように進むでしょう。北朝鮮の揺さぶりやロシアの揺さぶりでアメリカがヨタヨタし始めると、韓国は一氣に転落を始めるだろうと考えます。そうすると、ロシアや中国の思うつぼになっていくと見えます。

中国については、張子の虎になってきていると感じます。張子の虎ですから、あちらこちらで綻びが出ている状態です。問題がいくつも出て来ているから、習近平さんが突如暗殺されることは十分起こりうる状況になってきたと思います。習近平さんが暗殺されると、No.2が今はいませんから、滅茶苦茶なとんでもない人物が出てくる可能性があると思います。

これらの国々と比べてみても、日本が一番酷いと思います。何より政治家が惨憺たる有り様ですから。岸田さんは何やっているのでしょうか。少子高齢化対策など様々な所にお金をばら撒こうとしていますが、自分の延命策だけというのが透けて見えます。政治家の

何という酷さでしょうか。

経済界は、以前は一流と言われましたが、今は三流どころか四流・五流に落ち込んでいるように見えます。結果として、お金は稼ぐようにはなるでしょうが。

官界は大変氣の毒な状況だと思います。氣の毒というのは酷いという意味です。自分の意思に関わらず酷いことをさせられている、それが身に染まっているのが今の官僚です。

そういう状況を生み出したものは何かいうと、私は教育だと思っています。100 年 200 年単位で考えた時に、教育界の酷さ加減はありません。まともな教育ができなかったがために今の日本の惨憺たる有り様を生み出していると思うので、これから力を入れるべきは教育界の刷新です。教育に力を入れない限り、日本は救われません。

ただ、マクロで見るとどうしようもない状況でも、個に焦点を当てると良い人材が沢山出てきていると思います。

先日、長寿企業を研究しておられる一般社団法人 100 年経営研究機構の後藤先生にお会いしました。その中で、将棋界でもスポーツ界でも素晴らしい選手が出ているという話になりました。お聞しきた中で驚いたのは、将棋の世界では対局が終わった後に感想戦といって、第一手から最後までお互い感想等を言い合って対局の振り返りをするのだそうです。本音をさらけ出して反省会をするというのは驚きました。そうやって極限までやり合うことによって、良い人物・良い人材が生まれてきているのだと感じます。

ですから個のレベルで見れば、凄い。そういう人たちを生み出すような教育をしていくことによって、日本はまた復活をしていくのだろうと思います。戦後の一番良くない教育は「皆で渡れば怖くない」、これをやったがために日本は悪くなったのだと思っています。

お時間になりました。本日の講話を終了致します。有難うございました。